

「収穫感謝日」を覚えて

— 二つの歴史と二つの喜びを味わう時として —

舟 木 讓

アメリカでは、11月の第4木曜日を“Thanksgiving Day”と呼ばれる休日と定めています。今では史実か否かの確認は難しいようですが、その起源は、約400年前に移住した人々が、先住民の人々の協力で、豊かな収穫を得たことへの感謝の集いにあったと言われます。しかしやがてその移民の歩みは、紛れもない史実として、先住民の虐殺という犠牲を伴った歴史となります。その結果、1970年からニュー・イングランドの先住民たちは、その事実を風化させない為に、同じ日を「全米哀悼の日（National Day of Mourning）」と定め、過去の悲劇を想起し抗議する為の運動を始め、現在も続いています。同じ日が立場を違えれば一方では喜びの記念日となり一方では悲しみの記念日となることは、日本の敗戦記念日も同様であるように、歴史の中で常に忘れてはならない視点だと言えるでしょう。

以上の事実を踏まえた上で、この時期に改めて「収穫」という意味に思いを致すとき、私達は民族や宗教・信条等々の区別なく、自分たちの力を越えたものによって日々支えられているという端的な事実に変更して行き着くのではないのでしょうか。

秋は一般に実りの季節と言われ、日本国内でも様々な食材が食料品店を彩り、そこには作り手の苦勞と誠意そして矜持が詰まっております。しかし、台風等の自然災害が収穫前にその地を襲えば豊かな実りは望めません。ここから、人知を超える自然の恵みと力の前で、人間は極めて無力であり、その意味において相対化されざるを得ないという事実には気づきます。ただ、私たちは普段、自らの価値観や主義・主張に絶対的な信頼を置いたり、その延長線上で自分以外のものに様々なレッテルを張って安心したりしております。そして、人間をはじめとしてこの世に存在するものは本来相対的な存在でしかないという事実には気づかず、むしろ逆に「断定」を「安定」と感じがちです。ところが、「断定」はともすれば自分以外のものを「愚か」と断じたり「優れている」として自らを卑下したりして、いのちの序列化を当たり前のことと錯覚し、無益な「争い」へと発展しがちです。

「収穫感謝日」の背後にある二つの歴史の意味を今真摯に振り返り、無益な序列化の有する空虚さを「美味しい」実りで我々に教えてくれるこの季節を、感謝して共に味わいたいと思います。

（経済学部宗教主事）